

## 緑膿菌 耐性生まずに殺菌 光線とアミノ酸で

SBIファーマなど

大阪市立大学大学院医学研究科の鶴田大輔教授、小沢俊幸講師の研究グループはSBIファーマ（東京・港、北尾吉孝社長）と共同で進めていた緑膿菌（*Pseudomonas aeruginosa*）の感染皮膚潰瘍の研究成果を発表した。天然アミノ酸である5-アミノレブリン酸の局所投与と発光ダイオード光を使った光線力学療法（PDT）によって緑膿菌を殺菌し、細菌感染していない場合と同程度の治療促進効果を得ることに成功した。

緑膿菌は水まわりなど生活環境の中に広く存在しており、健康者には通常、病原性を示さない弱毒細菌のひとつ。様々な抗菌薬に耐性を示す傾向が強いため、日和見感染症の起因細菌として臨床の現場で問題となっている。

光線力学療法は、既存の抗菌薬の治療とはまったく違う作用の仕方で殺菌する。耐性菌が生まれることがないため、新たな細菌感染の治療法として期待されているという。

研究の成果は3月5日に皮膚科学専門誌のオンライン版に掲載された。3月から大阪市立大の皮膚病態学の臨床研究として、人を対象とした治療を始める。

2018.3.14日経産業新聞 朝刊9面